

所はたゞ其中間一寸の隙のみ。何ぞ知らん此一寸の知
もたま或は虚偽にあらざることを。

○汝恒に自から念へ、我今何故こゝにありてこれを爲
しつゝあるか。

○人心は膚淺なり、大恩は忘れ易く小惠は感じ易し。

○世に處して平坦の途に循へば安全と雖も凡庸なり、
山の如く海の如し、窮阻の路に陥らざれば高明の峰に
登る能はず、狂瀾千丈の底に淪まずんば萬里の晴眸を
見張り六合の大觀を達する能はず。

○人生の行路皆波濤の狀を呈す、大人は大波の如し故
に能く大上天下、小人は小波の如し故に能く小高小低。

○子女父兄の前にあるや容顏の婉なる天下美の尤も美
なるもの、音聲の諧へる天下妙の尤も妙なるもの。

○樂所一ならず、峰にあり谷にあり、貴賤貧饒皆を
轉ずれば均く是れ樂境。

○男は考へて語り、女は感じて言ふ。

○漫然市頭を通過するものは囊中必ず一物あらず、散
然事物を看過するものは心内曾ち觀察力なきが故な
り。



曲肱偕談

(其二)

森山吐虹
田中塵外

秋風起て白雲飛び、草木黃み落ちて雁南に歸るの
時、何を苦むでか北陸の天に向ひて、彷徨ふ我身
こそ果敢なけれど云へば果敢なし、左れと樂中な
ほ苦あり、豈に苦中に樂なからむやと、大悟徹底
して予は帝京を辭しぬ、艱々として勤め、營々と
して勵む事務の中も都門の風光の忘れられぬはこ
そ思ひ出すへき事もなく、満目の秋氣徒らに斷腸
する今日此頃、忽然として俗氣散し、神心爽然、
起て舞はしめしものは何そや、吐虹森山子との邂逅
近是れなり、予の子と相見ざる茲に十年、吁嗟袂
を分ちし時、彼れは未だ一個乳臭の頑童にして、
予亦た等して蠢爾たる一少年にてありき、爾來月

を閑する百餘、日を重ぬる實に三千、其間時に消
息を通せさりしに非ずと雖も、互に其風丰を剪翦
し、其意氣を想像するに過ぎずして、また一回の
會見なく半晌の談笑なかりしは、共に以て憾とせ
る所なりき、吁嗟、眞に久瀾又久瀾、好機は二
人をして、茲に此の憾を解き、胸宇を披いて僅か
に嘻々談笑の時間を與へぬ、其の始めて相遇ふや、
茫然隔隔し、互に寒暄の辭儀すら出でず、漸くに
して數言を重ねるに及び、胸中萬斛の情感一時に
湧空して、恰かも共に談すべき事なきか如かりし
も亦た怪しむに足らず、越えて翌日に至り、曉起
膝を交え、談論の緒を開きてより、或は時事を憤
り、或は嘯昔を評し、滔々數百言、底止する所を
知らず、氣煽借に万丈、其快其倫、譬ふるに物な
かりき、嗚呼昨の頑童たりしもの、今や則ち壯快
淋漓たる有爲の一壯年とはなりぬ、而して嘗て一
少年たりしものは、幾多嶮峻の世路に當り、辛酸
殆むど嘗め盡してなほ碌々たる吳下の阿蒙、窮老
の一措大と爲り畢らむとす、此翁白頭眞可憐、伊
昔紅顏美少年の感禁する能はず、
一晝二夜、語容易に盡きず、談未だ畢らざるに、

彼れ吐虹子去つて金城に歸る、乃ち中に就て一曲
「肱僂談」を作り以て寄せ、讀て餘白の割愛を請は
むか爲めに聊か之れか因縁を叙すと云爾
在越中高岡 座外 議
▲余好んで維新前後慷慨志士の詩歌を讀む、蓋し字句
の如何を問ふものにあらすして、唯志士の衷情を汲む
もの也、噫、幕政日に衰へては夷狄國權を凌辱し、櫻島
の沖、玄海の灘、鯨鯢怒濤を蹴へしては健兒目皆裂け、
苦戰幾度、妖雲慘として暗きの時、思ふに其意氣果し
て奈何なりしぞ、更らに悲しむ可きは幾百の志士、一
死君の爲めに盡さむとして鄉關を辭し、妻を去り子
を捨て、更らに親に別れ十年の忠誠は遂に一身を殺せ
し事なり、然かも其熱情は遂に貫徹してこの維新を生
ず、身明治時代に起臥せる者、誰れか殉國志士の恩澤
を記せずして可ならむや、嗟呼一度此等志士の詩歌を
吟詠すれば、意氣頗る昂りて毛髮天を突かむとするの
概あり(吐虹)
◎塵外曰く予亦た時に好むて志士等か熱血の詩歌を吟
詠す、橋本左内獄中に作るどころ七絶あり「苦冤難
洗恨難禁、俯則悲痛仰則吟、昨夜城中霜
始限、誰知松柏後凋心」と。嗚呼何ぞそれ沈痛

にして凄然なる此の如き、幾十星霜の後之を讀て志士
か當時の慘憺を想ふや切なり、『龍領虎口寄斯身半世
功名一夢中他日九原埋骨處刑餘誰又認孤忠』是れ
實に平野國臣か題を逸して作れるもの、一片の赤誠心
下に沸き、迸出して此の二十八文字をなす、之を讀み
之を吟せば誰れか紅淚滂沱たらざるものあらむ、之れ
其性行を追懷して以て今時を默想すればなり、後者國
臣の傳は既に記せられて世人の普く識れる所、而して
前者を盡せるもの未だ多く傳はらず、文壇の老將櫻痴
居士頃日實弟醫學博士橋本綱常氏の懇請に由り其の様
大の形管を以て左内か一生を描かむとす、稿成り版
刻せらるゝの日は、更らに後人をして感奮躍如たらし
むるもの多からむ、予は唯た鶴首して之を跋つ、
▲人間の是と非とを斷つて一身社會を脱し、白雲深か
き處に科頭箕踞し、吟嘯を擅にして身世を其境に終は
る者、賢と不肖とに關せず、余は寧ろこれを稱せざる
也、既に人をして社會の爲めに盡すの志なくむば、何
の暇ありてか其人を顧みるを得む、賢と不肖とは天の
授くる所、賢なるも誇るに足らざるなり、不肖なるも
愧つるに足らざる也、唯誇るへくんば滿腔の丹心社會
の爲めに殉するにありて、若し愧つべくむば人間の義

務を抛擲し去るにある也、而かも東洋の癖習は、これ
等の人を指して隱君子と稱し、或はたゞ一或は欣慕す
これ豈隱れるの甚しきものに非ずや、(吐虹)
◎塵外曰く未だ悉く探て以て律す可からずとするも、
能く時弊を罵り、積習を破らむとする至言といふべ
し、只だ夫れ去るへくして去り、隠るべくして隠るゝ
もの予深く咎めず、然りと雖も去るべからずして去り、
隠るべからずして隠れ、或は尙ほ一步を轉せば、去る
べくして去らず隠るべくして隠れざるもの世其類數な
しとせず、これ亦た東洋の癖習なるか、將た舶來の新
潮なる乎、未だこれを知らずと雖も、白眼一たび天下
を睨み、更らに潛心仔細に社會の真相を覗へは、思ひ
蓋し半ばに過ぎむ、
▲古書を繙きて西行一生涯則紙に及ぶ、其の現世を果
敢なみて、身を佛門に寄せんとせし折に口ずさみける
歌とて
いつなけきいつおもふへきことなれば
後の世知らで人のすくらむ
いつのよになかきねふりの夢さめて
驚くことのあらむとすらむ
なにことにとまる心のありければ

さらにも又よのいとはしき
清風吹て梢頭聲あるるとき、一度踊すれば、人生のあ
じきなきを感じ、徒らに厭世の志を生ぜしむ、思ふ
に少年者流、書を讀まむと欲すれば須らく豪爽壯活
のものを擇ふべくして、またかの厭世的文字に觸るゝ
べからず、(吐虹)

◎塵外曰く、由來佛者の厭世的なる、悲觀的なるは云
ふ迄も無けれど、吾輩は絶対に攻撃するものにあらず、
人生の行路甚だ難にして、時に其の地位其境遇に由
て、大に厭世の想念を湧かし、悲觀の感情を漲らすも
のまた凡夫の淺猿しくも已むを得ざる所ならむ乎、之
れを是れ絶対に排斥非難するは、人世の辛酸を未だ完
く味ひ盡さざるものに非らずむは、猶ほ頑童痴兒に高
尙なる科學或は繁劇なる家政を知らずと責むるにも似
て頗る無理なる注文と謂ふべきなり、然はあれど洵と
に子が云ふが如く、世の少年者流が夙夜盤雪の苦を積
み、學成り業了へて、而して後國家に竭すべきの時に
當り、厭世の觀念徒らに熾んに、齎らす所の英資空
しく顯はれざるに至らば、それ果して如何、想はざる
可からざるなり、夫れ只獨り少年者流のみならず、
苟くも粟を帝國に食み、籍を日本に屬するもの、百爲

國家てふ觀念を以て動き、萬事奉公てふ精神を以て行
はざる可からざるは論なく、此の觀念、此の精神こそ、
我金歐無敵なる國粹の精華にして、又實に我純一無雜
なる皇道の精髓なれ、彼厭世的悲觀なるもの、吾輩は
其情に於て酌む所あり、絶対に排斥する能はざるも、
少なくとも少壯有爲の同胞に對つては、熱心に之れが
反對の側に立ち、奉公愛國の實行を奨め、且つ希はさ
るを得ず、

▲本居宣長道の本源を詠みて
天地乃、極御照す高光、日之太神乃、道者此道
高御座、天津日嗣止、日乃御子乃、承傳閉末須道者許
乃道、
天乃下、阿乎比土貝佐之、朝夕爾、御影止與曾留、
道者此道、
始終一片の至誠を以て國粹を論ずる翁にして、其門下
に篤胤を生む所以のもの、また疑ふべからざる也、
(吐虹)

◎塵外曰く、紀記二典は神道家が依て以て唯一無二の
經典となせるもの、宣長篤胤は國學者が奉じて以て空
前絶後の大家と戴けるもの、然り而して滔々たる天下
多くは之を見て徒らに雄大なる著作として讀讀し又た

一の堂奥を窺ふものなく、彼れを仰いで、唯だ該博なる碩學として尊崇し、敢て其眞意を想はざるもの多し、嗚呼悲むへし、紀、記の二典は彼等が精くが如く、學ぶが如く、讀まれむが爲めに記されたるものならざるべく本、平の二家は彼等が尊むが如く思ふが如く唱はれむが爲めに出でたるものにあらざるへし、是に至て予は悵然として言ふ所を知らず、又た多く言ふを欲せず、請ふ焉れを默悟せよ、

新刊寄贈雜誌紹介

○正法第六十四號 神奈川町 青木三澤檀林東寮

信正會發行

社説「感應道交」を閲するに某氏の所説なりとて左の文字を見る

龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風生ず、鷄寒うして樹に上り鳴寒うして水に下る、犀は月を翫ぶに因て紋角に生じ、象は雷に驚かされて花牙に入るとは、是れ何の道理なるぞ、天際日昇れば月降る、雲騰て雨を致し、露結て霜と爲る、柳は緑に花は紅なる、都盧一段の眞風書けども成らず、天真法爾として松竹は直く荆棘は曲れり、鶴嘴の長くして鳬足の短き、

潜龍は淵に在り、翔禽は絆を脱す、是豈に感應道交、法爾自然の隨緣眞如にあらざるを得んや、易に曰はずや、水は濕に添ひ火は燥けるに就き、雲は龍に従ひ、虎は風に從ふと、是即ち同聲相應に同氣相求むるの感應道交にあらざらんや且夫れ天地萬象の生成養育の道ある、州土水火の安排布置する所、各々自位に住して、陽位の安く陰位の靜なるを以て、水火相扶け山谷相射はず、互に氣脉を通じ、彼此利用を便じて、萬像の起滅四時の循環、毫も其法則を差ふるとなきは何ぞや、彼の澤の氣は山に通ずるが故に、即ち能く許多の人獸草木に融す、若し夫れ澤の氣にして之に通ずる無んば、山にして物を生ずること能はず、山の氣にして能く澤に通ずるが故に、乃ち許多の鼃蠃蛟龍魚鼈の類に融するなり若し夫れ山の氣にして之に通ずる無んば、澤にして物を生ずると能はざるなり、然るに雨水以て之に潤ひ、火日以て之を暄むるが故に、物々此に滋長し、頭々彼に發生するとを得るなり、中庸に曰はずや、中和を致して天地位し万物育はると、夫れ天地交參し陰陽融通の道あるは、是れ即ち天地自然の性情なり、天地の性情は復た吾等が性情にあらざと云ふとなし、何となれ